



私が幼児教育を志した頃(13)

津守 真

アメリカの中産階級

一九五二年二月二十四日、私は次のひと月を過ごすホワイト家に移った。

途中の自動車のなかで、ハワード・ホワイト氏は何度も言った。「私たちは平凡な中産階級で、私たちの教会の人たちは勤労者ばかりだから、あなたもじきに私たちを好きになるでしょう。それから、心得ておいてほしいが、私たちには子どもが二人いる。二人とも実子ではない。六年前に州の児童相談所を通して全然知らない家からもらった。児童相談所は親の経済状態、教育程度、希望などを検討して養子縁組をさめる。私の家はそれに合格した。姉のドリーンは九歳、弟のウエスは五歳で、実のきょうだいだった。ふたりとも



もう大きかったから、自分でもよく知っていて、私たちのことを、パパ、ママ、と呼んでいる。」とホワイト氏は誇らしげに言った。私がこの家に泊まっていたときはドリーンは十五歳、ウエスは十一歳である。

ホワイト氏夫妻はいずれも五十歳を少し越えた年配で、ホワイト氏は齒科技工士をしている典型的な勤労階級である。夫妻とも教育程度は高くないが、極めて好人物であることが一目で分かる。ホワイト氏はずんぐりと太って、快活で屈託がない。電気をいじったり大工仕事を好む。本は殆ど読まないが、実直な職人である。夫妻とも貧しい家庭の出で、若いときから貧乏と戦ってきたと話す。ホワイト夫人の両親はスエーデンからの移民である。ホワイト夫人は稀にみる宗教的な人であった。

ホワイト家の生活

今度の家は今までと対照的で、マッチ箱のような小さな可愛らしい家である。夫婦の寝室と、二階に子ども部屋がふたつあるだけである。私はウエスの部屋に同居し、ダブルベッドでウエスと一緒に寝ることになった。ウエスも私も寝相がわるいので、夜中によく目が覚めた。一週間ほど後に、ウエスは床に寝て、私にベッドを譲ってくれた。それでもウエスは私と同室になることを大喜びして、当座の二、三日は私のベッドまで作ってくれて、私に愛敬をふりまいた。ウエスはすっかり私のことを尊敬しているのでおかしくなる位だった。朝起きると、私の前で直立不動の姿勢をとって、「あなたには素敵な奥さんが



いるんだね」と言つた。昨夜机の上に婚約者の写真を飾つてあるのを見ていた。学校中に私のことを言いふらし、翌日には近所の学校友達が私を見に来た。夜はまた、近所の高校生が私たちの部屋に来た。この家の人たちは教育はないが、愛情と善意に満ちている。

毎朝、ドリーンとウエス、ホワイト氏と一緒に食卓で朝の祈りをしてから朝食を食べる。夫人は皆のサービスに忙しいが、祈りのときは食卓に加わる。朝はコンフレキに、卵とベーコンであることは他の家庭と同様である。食事が終わるとそれぞれに飛び出してゆく。私は食後の片付けを手伝いながら、夫人とおしゃべりをした。ホワイト夫人は、「神様がこの子たちを私たちに与えてくださつて、なんて幸せなんでしょう。この子たちは私のエンジェルです」と朝食を用意しながら何度も言つた。「神は愛ですよね、そう思いませんか？」子どもたちはこの言葉に閉口しているみたいであつた。私もときどきなんて単純なんだろうと思つてしまつた。いま思えばホワイト夫人の言つたように、こう思ふことによつてこの家庭は皆がひとつになれたのである。

ウエスはどこか落ち着きのない子どもである。学校から帰るとすぐにテレビに飛びついて夜寝るまではなれなかつた。当時日本にはまだテレビはなくて、私はアメリカに来るまでテレビを見たことはなかつた。最初のうちは私も一緒に見ていたが、彼が見る番組はカウボーイのピストルの撃ち合いで、これは平和の思想に反すると思つた。テレビが食後の会話の時間を占領してしまうこともあつた。ウエスは学校の成績もよくない。ドリーンは中学三年だが、美貌で、ボーイフレンドがいた。ホワイト夫人はこのことも心配してい



た。

里親と里子

ある晩、教会の集会からの帰途、自動車の中で話が二人の子どもたちのことに移った。ホワイト夫妻は熱をこめて話し始めた。ドリーンが生れたのは母親が十四歳のときだった。父親は海軍の提督の息子で、息子に厳しかった。息子は素行がおさまらず、酒場を飲み歩いていた。親の反対を押し切つて結婚し、次々に子どもが生れた。ドリーンを筆頭に六人の子どもがいたにもかかわらず、ますます酒癖がひどくなり、数年前に別の女ができて、ドリーンの母は捨てられた。いまは刑務所にいるとのことだった。ホワイト夫妻がこの子どもたちを引き取ったとき、ウエスはいじけきつていて、夫妻を上目づかいに見て、一言も口をきかなかつたというし、来た当座は金を盗んだり、万引きしたりした。ドリーンは泣いてばかりいた。実の母親を慕っている様子も見えるので、親元に帰したほうがいいのではないかと考えたこともあったが、惨めな生活になることが目に見えているので、自分たちで育てようと決意した。いまふたりともだれが見ても実の親子である。始めから知っている友人たちは、よくここまで来たと感じている。笑いながらしゃべっているこの子どもたちには、暗い過去があつたとは思えない。二人の子どもたちは、養父母に従つてゆくのが最善の道であることを知っている。児童相談所は実の親には会わせない方針であるが、ホワイト夫人は、子どもたちが成人したら、親に会わせようと思つている。



しゃべっているうちに、私たちはガレージの中の冷えきった自動車にすることに気がついた。外は雪が一面にふりしきって、零下十度の寒さである。家の中に入って温かいコーヒ―を夫妻と一緒に飲みながら、だれにでも温かい家庭が必要であることを思った。里子を育てるには人一倍の苦勞がいるだろう。けれども育て育つうちに愛情がかわされて、ホワイト夫妻はもうこの子たちがいなければとても寂しくて生きてゆけないと言う。夫妻は経済的に余裕があるわけではない。昨年から自動車故障していても修理に出せないでいる人たちである。この子たちはなんとしても育てるのだと言う。ドリーンのボーイフレンドは数カ月前にドリーンを構わなくなってしまった。まだ十五歳なのに五歳も年上の男子とそんなに親しくは心配でたまらなかつたホワイト夫人はドリーンが悲観しているのを見ると、今度はかわいそうでたまらなくなるのである。ウエスも最近は休日というとお金をもらって一人で映画をみにゆく。これも夫人の悩みの種である。私はこんな家の家族の一員になった。

ホワイト家の台所には、始終近所の人がおしゃべりに来ていた。私はしばしばそれに加わった。ホワイト夫人はおしゃべりのあとには、「神様がこの子たちを私たちに与えてくださって、私はなんて幸せなんでしょう。神は愛ですよね。」ときっと付け加えた。

今日は驚くべき話を夫人から聞いた。新聞で五つ子の誕生の記事を読んだとき、ドリーンは、どうして五人もいちどきに赤ん坊が生れるのかと尋ねた。こんなことはめつたにないと説明したらドリーンは急に泣き出した。訳を聞いたら自分の母は、数年前に赤ん坊が



生れた。そのときにだれも赤ん坊を生むのを助ける人がなくて、ドリーンが出産を助けた。それで、五人もいちどきに赤ん坊が生れたら、いったいどうするのだろうという質問だった。これがドリーンの九歳のときだった。

この話を終えて、夫人は次のように話した。「現代の世界ではだれも一人で生きることができませんね。だれひとり同じ性格の人はいないけれど、だれでも幸福に生きる権利をもっています。だれひとり捨てられてはなりません。だれでも人間として尊敬される権利をもっています。だれでもその人にふさわしく世の中に貢献する道があります。」学歴はなくても最も教養のある人の言葉である。これは私が現在付け加えたのではなく、私の日記からの引用である。アメリカの中産階級には、その当時すでにこういうスピリットがあった。

アメリカの大学生活

一方、私自身はどうかと言えば、大学の勉強が本格的に忙しくなってきた。当時のアメリカの大学は知識のデパートのようなもので、試験に合格するためには考える暇なしに、文献と専門書を読まなければならなかった。

異国にいと、日本の田園風景が懐かしくなるのは多分どの時代にも留学生の常である。私も藁葺き屋根や段々畑、蝉の鳴き声、地引網などの日本の田舎の風景を懐いて心が疼いた。五十年前にはどこにもあつた日本の自然と共にある生活の余裕であつた。アメリカ



カ人には自分の間日本の良さは分らないだろうと思ひ、それが理解されるようになる前に、日本の風景が壊れてしまふのではないかと異国にあつて恐れた。児童研究についても、子どもの心を汲むだけの余裕がなくて何の発達心理学があるものか。何の児童教育があるものかと私はお茶大の幼稚園を懐かしく思つた。私は「静まりて我の神たるを知れ。」という聖書の言葉を思つた。

私が勉強していた児童研究所は、発達心理学が主流だったから、幼児教育やナースリースクールの実習をとる学生は少なかった。ナースリースクールの主任、ミス・ヘッドリーは、当時全米の幼児教育界で一番力のあつたACEI（国際幼児教育協会）のリーダーだった。（ミス・ヘッドリーの著書は後に『幼稚園』と題して日本語に翻訳された。）幼児教育の講義は、D.F.M. フラーの担当で、学生は数人しかいなかったもので、ごくインフォーマルに進められ、私は日本の幼稚園の紹介で倉橋惣三の『育ての心』の詩を翻訳して話したが、私の英語の拙さもあつて、あまり関心をもたれなかつた。

アメリカ人には世界を股にかけて飛び回る可能性が開けていたが、当時の日本人にはそれが閉ざされていた。国際と言へば、外国の新しい知識をいち早く知る窓口というような認識で、外国から言へば、日本に何かを学ぶものがあるとは思われていなかった。

私はレポートを書くのに、ホワイト家にはタイプライターがないので、前に泊まつていたW家にしばしばタイプライターを打ちに行った。ある晩W家から帰つてきたら、ホワイト氏の妹が十八歳の娘と婚約者を連れて来ていた。婚約者の十九歳の青年は今度軍隊にい



かねばならず、兵役は四年間だと顔を曇らせた。私は日本は戦争に負けたおかげで兵役の途中で軍隊から解放されたことを話すと、青年は羨んだ。

少女の笑顔

私の指導教官、D.F.ハリスは、私が日本で知恵遅れの幼児のグループを開いていたことを知っていて、三月の休みの間に行くようにと、ミネソタ州南部のオワターナの学校を紹介された。三月二十三日から四日間の予定で私ははじめてバス旅行をすることになった。私は父がかつて米国に留学したときに使った大きくて頑丈なトランクしか持っていないかったので、手ごろな鞆がなくて困っていると、ドリーンが自分のスーツケースを貸してくれた。「あたしはあなたの役に立って嬉しい」と言つて喜んだ。このときのドリーンの美しい笑顔を私は忘れることができない。

長い年月の間に

私の壮年期は、まだ日本人が外国に行くのは大変な時代で、殊に私の子どもたちが小さい頃は、私がアメリカに行くことなど考えられもしなかった。私がアメリカにその次に行ったのは、二十年後の一九七一年だった。私のためのレセプションが、ホワイト家で開かれたとき、料理が好きなホワイト夫人は何日もかけて大御馳走を作ってくれた。ホワイト氏はすでに健康を害して、首が痛いと言った。そのときにはドリーンもウエスも



ホワイト家を離れ、結婚して子どもがいたという話だがすでに離婚していた。その年の暮、ホワイト夫人から夫妻で一緒に撮った写真が送られてきた。その裏には夫人の自筆で、「ハワード、何と美しい顔でしょう。エンジェルのように。私の夫は恍惚の人になろうとしています」と記されていた。三回目に行つたのは一九七四年で、ホワイト氏はすでに亡く、夫人がひとりだった。壁にかけた楕円の額縁にいられた家族の写真を夫人は両手で撫でた。私は胸が熱くなった。四回目に行つたのは一九八五年だった。市の北のはずれの小さな家に、ドリーンが離婚した最初の夫とその奥さんがホワイト夫人を引き取つて面倒をみていた。夫人はソファにすわつたきりで、皆は彼女の記憶は失われて何も分からないと言つた。だれが話しかけても、ホワイト夫人は首を振るだけだったが、私は彼女はすべてを了解していると思つた。私と妻は、夫人には恐らく最後になるだろう別れのキスをして帰途についた。それから間もなくミネアポリスの友人から新聞の死亡記事が送られてきた。「リリアン・ホワイト 享年八十三歳。月曜日午後二時三十分より記念礼拝。ウオツシユバーン・マクレヴィ・スウォンセン・チャペルにて」と記されていた。

ドリーンとウエスがいまどうしているのかは分からない。しかし、私にははつきりと確信できることがある。この子たちは、あの信仰深く献身的な養い親を決して忘れることはなく、たとえ現在が困難な境遇にあつたとしても、あの頃を思い出すときには心に安らぎを覚えているに違いないということである。いま私があの子たちに会つたとしたら、成長期のあのひとときの幸せは一生涯の心の支えになつていて、共に語り合えるだろう。



付け足し

ちょうどこの原稿を書いているとき、十八年前に私が現場の保育者になって最初の日に出会ったH夫の家族が学校に訪ねてきた。アメリカに移住して十数年になるが、一月程日本に帰って来たのである。H夫のことは『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）の第1章1「子どもがはじめた小さなことに目をとめる」、第7章1—2「再会」及び『子どもの世界をどうみるか』（NHKブックス）のII—1「理解できない子どもの行為をもちこたえる」に記した。一九九二年にアリゾナで開かれたOMEP世界大会の際に私共がサンフランシスコの家を訪ねて以来、八年ぶりである。私を見るなり、H夫は、天井に頭が届くくらい飛び跳ねて喜んだ。この子はアメリカにいても毎日私の写真を見て私の名を呼んでいるのだと、両親といまは大学生になった弟たちがこもこも話してくれた。私は保育者の有難さと思った。子どもは成長期の危機を共にしてくれた人をいつも心に留めているが、そのことが保育者に伝えられることは稀である。

幼児期に幸福に過ごした日々の記憶は、生涯にわたって心の支えになる。幼児教育の成果は、後の時期の成功の度合によって測れるのではない。幼児期にあるときの一日が満ち足りた一日であるかどうか常保育者に問われている。